羽場久美子・小森田秋夫・田中素香編

『ヨーロッパの東方拡大』

(岩波書店, 2006 年)

田 口 雅 弘

(岡山大学大学院社会文化科学研究科教授)

**Haba, Kumiko; Komorida, Akio; Tanaka, Soko eds.,
European Enlargement to the East
(Tokyo: Iwanami Shoten, 2006)**

TAGUCHI, Masahiro

Graduate School of Humanities and Social Sciences, Okayama University

2002 年, EU 東方拡大の候補国として当時名前の挙がっていた諸国を研究する, わが国の専門家を集めた研究会が発足した。本書は, この研究会の成果に, ヨーロッパの東方拡大というテーマを補完する上で不可欠な研究者をさらに加えて執筆された論文集である。本書は論文集という体裁はとっているものの, 足かけ5年にわたる研究会の成果がベースになっているだけに, 問題全体のポイントと本質がうまく浮かび上がるように構成されている。以下, 簡単に全体の内容を紹介し, 誌面の関係でいくつかの論文と問題点に絞って論評したい。

本書の構成は以下の通りである (サブタイトル省略, 執筆者敬称略):

総論 ヨーロッパの拡大 (羽場久美子)

I グローバル化の中の欧州統合

東方拡大と EU 経済 (田中素香)

欧州憲法と東西欧州 (庄司克宏)

シティズンシップの確立を求めて (宮島喬)

アメリカン・グローバリゼーションとユーロ (増田正人)

EU の東方政策 (東野篤子)

NATO の拡大と中・東欧 (広瀬佳一)

II 新加盟国から見た新しい欧州

欧州憲法条約はどう語られたか (小森田秋夫)

EU 拡大とチェコにおける新しい社会像の模索 (中田瑞穂)

スロヴァキアの EU/NATO 加盟 (長與進)

ヨーロッパの東方拡大とラトヴィア (志摩園子)

EU の対外政策とエストニア (小森宏美)

ルーマニアの東方外交 (六鹿茂夫)

III EU 拡大と周辺地域

トルコ（夏目美詠子）

旧ユーゴスラヴィア（岩田昌征）

西バルカンと EU/NATO（定形衛）

クロアチア（石田信一）

欧州拡大とウクライナ（藤森信吉）

EU の東方拡大とロシア（下斗米伸夫）

このように、本書は三部から構成されている。

まず序章では、ヨーロッパ地域統合の歴史的プロセスとその意味を、グローバリゼーションと冷戦終結の流れの中で整理している。さらに、中・東欧の体制転換プロセスを整理しながら、経済格差の存在、ナショナリズムの台頭などの課題に触れ、また近隣諸国政策が欧州の安全保障に重要である点、欧州が米国に並ぶ第二の国際規範を確立していく必要性などを指摘している。

第Ⅰ部では、グローバリゼーションの流れの中における EU 全般の諸問題をベースに東方拡大が論じられている。すなわち、冷静体制崩壊後の世界秩序の再編、グローバリゼーションの進行のもとで、地域協力がどのように再編されつつあるのか、また新しい社会制度がどのように模索されているかが論究されている。特に評者にとって興味深かったのは、(1) 中・東欧諸国経済成長の二極化によりこれらの諸国が EU 経済の中にどのように取り込まれていく可能性があるかを分析している点（田中）、(2) 拡大によって「民主主義の安全保障」が確保され、また加盟諸国が「グッド・ガバナンス」を達成しようとすることによって同様に EU 安全保障が強化された反面、「民主主義の赤字」や「非対称性問題」などのパラドクスが生じた点の分析（庄司）、(3) 中・東欧の民族的マイノリティとシティズンシップの問題に言及している点（宮島）、(4) EU 拡大が紆余曲折を経ながら進行していったプロセスの描写（東野）、などである。

第Ⅱ部では、2004 年の EU 東方拡大で新規加盟国となったポーランド、チェコ、スロヴァキア、ラトヴィア、エストニア、およびルーマニア（出版当時は加盟予定）の諸問題が、それぞれの執筆者の問題関心に沿ってテーマを絞りながら論じられている。なかんずく、ポーランドで欧州憲法条約をめぐる繰り広げられた、EU の中でいかなるポーランドを形成していくのか、また EU とどう付き合っていくのかという議論（小森田）、ロシアとの関係が大きな影を落とす小国の立場（小森、六鹿）などが興味深い。

第Ⅲ部では、EU 周辺地域の問題が論じられている。早くから加盟申請をしながら加盟が認められないトルコをめぐる EU 側およびトルコ内諸勢力の加盟への温度差（夏目）、旧ユーゴ戦争における欧米の関わり合い（岩田）、ユーロ懐疑主義一辺倒ではないロシアの立場の分析（下斗米伸夫）など、いずれの章も読み応えがあった。第Ⅲ部には、東方拡大の更なる可能性と限界、EU と EU 周辺諸国との協力関係のあり方を議論する上で、貴重な指摘がたくさん含まれている。

全体として、ヨーロッパの東方拡大問題を、オリジナリティ溢れる第一線の研究者が重層的な視点でまとめ上げた良書で、ヨーロッパの真の姿を知る上でも拡大 EU が抱える諸問題を理解する上でも、示唆に富んだ内容に仕上がっている。

このような基本的に高い評価を前提としながら、いくつかの問題についてコメントしておきたい。

まず、EU 東方拡大と体制転換の相互関係が十分に明示的ではなく、研究課題として残った

ことである。いずれの執筆者も、体制転換の問題は十分に意識しながら執筆している。EU 加盟で各新規加盟諸国の改革が終わったと評価する執筆者はおらず、様々な政治、経済、社会問題が大きな課題として残されていることは、各論者が各章の中で指摘しているとおりである。しかしながら、EU 東方拡大が政治的理由で加速されたことが旧社会主義諸国の体制転換プロセスにどのような歪みをもたらしたかという点について十分に言及されていないように感じる。体制転換という視点から見れば EU 加盟はひとつの通過点であり、体制転換という要素をもう少し加えれば、新しい EU の姿をより構造的に描写できたのではないだろうか。

つぎに、EU 拡大の限界性についてももう少し知りたいところであった。拡大によりさらなる「多様性」を抱え込みながら「統一」を目指していくのか、拡大から深化に重点を移し EU の国際競争力強化にエネルギーを集中していくのか。この問題は、本書が刊行された頃から方向性が明確になってきた。すなわち、EU は「ヨーロッパを拡大し、ヨーロッパの周辺に孤立した地域を残さないことによってヨーロッパの安全保障を図る」という戦略から、「ヨーロッパの範囲は見えてきており、その範囲内でいかに統合を深化させ EU のポテンシャルを高めるか」という戦略に大きく舵を切りつつある。各章を丹念に読めばその問題が自然と浮き彫りになってくるが、できれば東方拡大によって見えてきた拡大の限界性を、もう少し明示的に議論する章が欲しかった。

そもそも拡大の限界論は、文化的多様性の広がりによる危機感よりも経済的コンテクスト（新しく取り込んだ貧困地域に対する援助の負担と効果）から出てきている問題である。したがって欲をいえば、経済学を研究する評者としては、経済問題にももう少し言及して欲しかった。拡大のメリット・デメリット論争、EU 予算の配分をめぐる論争、新興諸国の加盟による EU 地域間格差拡大の問題、産業政策（とりわけ農業）をめぐる確執、失業問題と労働移民の問題など、経済問題は東方拡大論争の重要な柱でもあった。

さらに、中・東欧諸国の右傾化についてももう少し切り込んで欲しかった。「90 年代中・東欧の主要な問題とされた「極右」ナショナリズムの波は、政治の少なくとも表舞台からは退いており、そのことは EU 加盟という大イベントのもった淘汰効果を物語っている」（宮島，89 ページ）という評価もあろうが、EU 加盟によっても解決されない経済問題が数多く残されている現状で、右派、民族主義はいかわらず国民の不満を吸収する温床となっている。EU 全体の右傾化が（最近の傾向は主に嫌イスラムに端を発しているが）、こうした問題とどのように連動しているのかも関心のあるところである。

もっとも、これらのコメントは評者の関心に引きつけてないものねだりの要望を述べたに過ぎず、本書の分析を批判するものではない。いずれにせよ本書は、中・東欧地域を研究する上でも、EU の将来を考える上でも、基本的視点を与えてくれる良書といえよう。

（本文 361 pp.+ 年表・資料 10 pp.）